

故小杉 清先生の思い出



私と先生のお付き合いは昭和38(1963)年5月、先生が香川大学農学部から園芸学部(花卉園芸学研究室)に教授として赴任されてから始まります。当時、研究室には浅山英一助教授、文部教官の私と農場に渡辺重吉郎技官がいました。

当時の園芸学部の最大の課題は、将来4年制の学部だけでなく、修士、博士課程を持つ大学院大学になることでした。それには、すべての教官が学位をもつことが必要でした。このときの園芸学部には学位所有教官がわずかに5名だけで条件不足でした。この理由で先生が香川から赴任されたという事実があります。先生は赴任後直ちに、私はもちろん他の教室の教官にも熱心に学位の必要性を説かれ、このことは私にとって最初に最も印象的なことになりました。この先生のご努力により10年程で園芸学部が大学院大学の資格を得ることができました。

私自身、東大植物生態学研究室に内地留学をして生態学を勉強していましたが、研究結果がわかりにくく、しかも時間がかかりすぎると先生からご指導をいただき、やはり重要な観賞植物の花や葉の色彩に研究テーマを替えて京都大の学位を取得し、現在まで斑入りやカラーリーフなどを含めた色彩の問題をテーマにしております。

先生ご自身の、いわれる重要な園芸のお仕事としては、現在もあるアルミ温室の建設でした。当時の園芸学部温室は鉄骨で年々の錆び防止など、整備がたいへんでした。ちょうどこのころ錆びないアルミ温室の普及がアメリカの園芸雑誌に紹介されました。この記事を先生がご覧になって、今後これが日本でも絶対必要であるといわれました。いち早く学部で作ろうと建設費の入手にご努力され、4年間で4棟240坪のアルミ温室ができました。これが国産アルミ生産温室の最初になりました。建設にはアルミ初仕事の業者はもちろん、村井千里さんや渡辺重吉郎さんのたいへんご苦労がありました。

先生の研究は、香川大学時代からグラジオラスの花芽分化を中心として、多くの花卉の花芽分化を双眼顕微鏡下での剥皮法によりご停年まで続けられました。しか

し先生の停年間に走査型電子顕微鏡による立体的な花芽分化の研究が欧米で始まりました。日本ではこの新顕微鏡は超高額で入手できず、また時間的にも間に合わず、先生の研究がまとめられなかったことは私達にとっても最も残念なことだったと思います。

先生はお話が好きで、極端ないい方をしますと長くて終わりがありません。また、同じ話題を同じことばで最後まで繰り返される特技(?)をお持ちでした。このように日本語の話術はユニークで堪能でしたが、外国語はまったくお嫌いで、すべて人任せでありました。

先生の話は、先生が教師になる前の7年間、太平洋戦争で花栽培ができなくなるまで、父親(小杉喜四郎氏、温室800坪)とユリ、枝物、バラなどの切花生産を世田谷でされたため、花生産技術や花産業のことがほとんどでした。したがって、趣味的な花づくり、趣味の会、植物コレクションなどは好きでないと常々いっておられました。先生の教師としての誇りと自信は、大型営利経営を経験した大学の教授は他大学にいないということから生まれ、実用の必要性を常に我われに説かれておりました。当時経験のない私にとって貴重なお話がたくさんありました。

またご自分の家は武家ではないが旧家であることから、町会のお仕事を積極的にされていたため、そちらのお話もたくさんお聞きしました。停年になられてからは小杉家の歴史の調査をずっとやられたそうです。

今年10月9日に次男忠夫氏宅(先生のお宅と同じ敷地内、歴史的な先生宅は奥様が入院のため空き家)を安藤敏夫先生とお線香をあげに参りました。齢80にも近い私には樹齢100年(?)の太い柿の木がお庭にまだ生きているのを見て感激し、さらに、昔のその他いろいろを思い出しました。

88歳の米寿のお祝いの際はとてもお元気で、100歳までご丈夫かと思われましたが、残念なことに肺炎にかかり97歳でお亡くなりになりました。ご子息によれば認知症はなかったようですが、足腰が急速に弱り、老衰といえるご最後とのことでした。

まだまだ思い出はたくさんありますが、最後に先生のご冥福をお祈りして筆をおきます。

(横井政人)